

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：34401
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2011～2014
 課題番号：23720155
 研究課題名(和文) ロマン主義におけるプラグマティズムの可能性 コールリッジと十九世紀リベラリズム

 研究課題名(英文) Possibilities of Pragmatism in Romanticism: Coleridge and Liberalism in the Nineteenth Century

 研究代表者
 中村 仁紀 (NAKAMURA, YOSHIKI)

 大阪医科大学・医学部・助教

 研究者番号：30582564

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：コールリッジに胚胎するリベラリズムとその問題を考察するにあたり、主に『生命論』等での彼の科学的思考の特性と19世紀進歩主義的社会思想への影響(科学)、後期の著述に現れる観念論ベースの哲学的「自由」概念のアメリカ超絶主義への受容のされ方(文化)、18世紀末革命言説への内在的批判と「自由」概念の成熟(政治)、の3点を扱った。
 3点目は論文執筆中であるが、それ以外はすでに発表(口頭・論文)済みである。

研究成果の概要(英文)：I examined how liberal thought has taken shape in S. T. Coleridge and what kind of problems are latent in it chiefly from the following three aspects: the characteristics of his scientific mode of thought in "Essay on Scrofula" and "Theory of Life"; and their influences on progressive Socialism in the nineteenth century (science); the adaptation of the philosophical idea of liberty based on Idealism, which often appears in his later writings, into American Transcendentalism (culture); his critique against the eighteenth-century political discourse on revolution and reform, and the way in which his idea of liberty has grown (politics).
 The first two have already been published (orally or in writing) while the third is to be prepared.

研究分野：英米文学

キーワード：ロマン主義 リベラリズム プラグマティズム 個と全体 政治的自由 科学的方法論 アメリカ超絶主義

1. 研究開始当初の背景

Richard Rorty は、自己解体的な「脱構築」から実践的な知的営為としての「プラグマティズム」に重心を移してポストモダン以降の哲学の在り方を再考する中、ロマン主義にプラグマティズム的思考の源流を見出している(Richard Rorty 1982)。Rorty によるとロマン主義は、論理の精密さより語彙の豊饒さやコミュニケーションの過程に重きを置き、真理の客観的規範化ではなく、文化的想像力と社会的連帯を通してコミュニティを実践的に形成していくリベラルな文化形態の萌芽的現象とされる。彼のこうしたロマン主義の再定義は、ロマン主義を 1960 年代以降の脱構築的アプローチに見られたテキスト・ベースの文学研究から解放し、より包括的な「実践的知」の歴史的ネットワークに置きなおす試みと捉えることができる。

しかしながら、Rorty の試みはロマン主義の現代的意義を浮き彫りにさせた点で非常に重要である反面、時代背景の異なる(アメリカ哲学の)プラグマティズムと接合させることで、ややもすれば 18 世紀英国の詩人・思想家が直接関わっていた社会・政治・文化の文脈が捨象されがちになる。一見超越的・理想的なものを求めるプラトニズム志向の文化現象としてのロマン主義がどうして、またどのようにして、プラグマティズム的側面を発現させ、リベラルな文化形態となりうるのか、という問題に対して実証的な方法で答えようとする研究はまだ十分に多いとは言えない。

2. 研究の目的

その観点から当研究は、詩人としてだけでなく、文芸批評、科学、哲学、宗教、政治を含むヨーロッパの様々な知の領域にコミットしていた S. T. コールリッジの思考様式の特徴や他領域との影響関係を考察することで、ロマン主義の実践的な知がどのようにプラグマティズムへと展開していったのかという問いに歴史的な視座をもって、かつ多角的に取り組むことを目指した。

研究の焦点として、18 世紀から 19 世紀に思想・政治・経済の領域を中心にして英国で特に顕著になった「リベラリズム」に着目し、特にフランス革命以降ヨーロッパ社会において発達した近代的個の「自由」の概念が様々な分野(哲学・科学・政治等)におけるコールリッジの言論の中でどのように消化され、19 世紀以降のリベラリズムへとつながっていったのかを把握することを試みた。これにより、これまで脱構築を通じて文学および哲学の枠内で漠然と結び付けられていたロマン主義とプラグマティズムとの内的関係を「歴史化」し、前者を後者の源流として捉えるための展望や条件を提示できると考えた。

3. 研究の方法

コールリッジに胚胎するリベラリズムとその問題を考察するにあたり、主に以下の 3 点を扱った。

“An Essay on Scrofula” (1816) や “Theory of Life” (1816) での彼の科学的思考の特性、及び 19 世紀進歩主義的社会思想への影響(科学)：

ニュートン以降の経験科学では忌避されながら 18 世紀に起こった「生氣論」と「機械論」の生命概念をめぐる論争で焦点となっていた「仮説」思考の妥当性に着目し、コールリッジが上記二つの医学的論考において、「物質」や「生命」といった概念に対してどのように「仮説」思考を実践しようとしたかを考察することで、政治・文化の領域以前の、思考様式のレベルでの彼のリベラルな側面を検証した。またそれが進化論に基づいたハーバート・スペンサーの社会主義に影響を与えた点に触れ、「個体」と「全体」を社会的視座で統合的に捉えるコールリッジの試みがいかにして 19 世紀の「科学主義」イデオロギーに吸収されてしまったかに着目することで、そこに内在する問題点を考察した。

後期コールリッジの著述に現れる観念論ベースの哲学的「自由」概念のアメリカ超絶主義への受容(文化)：

R. W. エマーソンらの超絶主義者や初期のプラグマティストら、19 世紀アメリカの思想家がいかにコールリッジの哲学的な「精神の自由」を彼らの政治的文脈に当てはめ、徹底的な「自律的個」をベースにした理想社会の原理として受容したかを確認することで、こうした文化的受容の影響力の射程と、そこに見受けられるコールリッジのリベラリズムに対する脱文脈化・歪曲・肥大化のあり方を考察した。

18 世紀末革命言説への内在的批判と「自由」概念の成熟(政治)：

革命や社会改革を訴える 18 世紀末の非国教徒・急進派の知識人や政治運動家らの言説を支える(権利は社会的条件から独立して個々の人間にア priori に備わったものとする)「自然権」理論に対し、コールリッジがそうした急進的言説に与しながらその問題点をどのように解決し、政治的「自由」概念を捉えなおそうとしたかを考察した。それにあたり W. ゴドウィンが社会の原理として重視した正義や義務の概念がコールリッジに与えた影響に着目し、ゴドウィン経由でコールリッジの政治思想が 19 世紀リベラリズムへとつながっていく過程を捉えることを試みた。

4. 研究成果

上記 ~ に対しての成果は以下の通りである。

“An Essay on Scrofula” では、それまで広く流布していながら明確な定義や対処方法が難しいと考えられていた瘰癧(結核性頸部リンパ節炎)に対し、瘰癧そのものでは

なく、近代医学における療癩研究を支える認識論や定義のための方法論が論じられている。コールリッジは17世紀の外科医R. ワイズマンの定義を取り上げ、そこに反映されている医学言説の方法論上の曖昧さを批判的に考察した。ワイズマンの定義には唯物論的解釈、全体論的解釈いずれも可能であるとし、前者のうちに病気の正体が単一の物質的なものに還元されてしまう危険性が、後者のうちに生氣論や有機体論に内在するような、因果関係を捨象して病気の実体を無条件に措置してしまう危険性が含まれていると主張した。彼にとって療癩研究は、「いかに現象に対して機械論的因果律に還元されることなくトータルなものとして記述するか」という経験科学の理論的枠組みの在り方を考察するケーススタディとなっていたのである。当研究ではその点で、“An Essay on Scrofula”を経験科学的帰納法や哲学的基礎づけ主義から距離を取ったプラグマティックな思考様式を模索する姿勢が萌芽的に表れた論考と位置付けた。

また療癩論から発展的に生まれた“Theory of Life”では生命概念を「個体化への傾向」という動的プロセスとして捉え、生物学的のみならず社会的文化的に自立する「個」の行きつく先に人間を据えることで、後の政治論“On the Constitution of the Church and State”(1829)に見られる、社会を生理学的ダイナミズムの比喻で捉える視点を形作った。こうした全体論をベースにしながら生物学的な「個」を抽出しようとする思考は後にJ. S. Millらが評価するコールリッジのリベラルな社会学的スタンスの元となっていることを確認した。同時に、“Theory of Life”が19世紀中期のH. สเปนサーに影響を与えた点を考察すると、J. S. Millとは系譜の異なる、社会の発展に伴う個の自由が科学的な「法則」として解釈しなおされる傾向が認められた。この点で、コールリッジの科学的思考から生まれた「個」の概念の受容史は、自然哲学的な全体論に対する反動としての「科学主義」(scientism)がいかにリベラリズムや民主主義的思想の中にまで浸潤しうるかを示すケーススタディとなりうることを示された。

イギリスでは“On the Constitution of the Church and State”に見られる政治的自由の条件を模索する論考が高く評価され、アメリカでは、特に超絶主義運動や初期プラグマティズムのJ. Deweyらの中で、*The Friend* (1818)や*Aids to Reflection* (1827)に見られるプラトニズムに基づいた超越的なものに対する憧憬や個人の内的経験を觀念形成のプロセスとして捉えようとする(ドイツ觀念論経由の)「自由意思」が広く受け入れられた。超絶主義者にとってのコールリッジは、「個人主義の形而上学化」という極端な形で政治的独立の精神的根幹を提供してくれる

存在となっていたと同時に、プラグマティストにとっては「個の自由をベースにしていかにコミュニティ形成を実現するか」という観点を提供していた。こうした大陸横断的受容が、コールリッジのリベラルな思想の射程の広さと危険性をはらんでいると同時に、アメリカのプラグマティズムがドイツ觀念論をどのように摂取したのかを理解する上での思想的焦点となりうることもわかった。

コールリッジは1790年代中期、フランス革命に影響を受けた急進派のコミュニティに飛び込み自ら講演活動を通じてピット政権を批判し、社会改革の必要性を訴えた。しかし急進派が推進するような、社会の既存の慣習や価値観を否定する過激なアプローチには懐疑的であったコールリッジは、ゴドウィンの合理主義的無神論に対しても批判的であり、宗教的感情や個々の紐帯を意識した社会モデルを提起した。しかし両者のこうした「質的」差異とは別に、当研究では社会構成の原理を探るコールリッジの政治思想にゴドウィンの義務観念がしっかりと根を下ろしていること、それゆえ両者を当時の急進派が依拠していたJ. ロック以降の自然権理論ではなく、社会福祉と個人の自由を統合的に理解することを試みる19世紀社会学の萌芽的位置に置いて理解できること、を示した。ただし、コールリッジの議論には、社会階級を前提としてバランスの取れた社会を構築することを構想していたことから、(ゴドウィンが想定するような個としての自律性を持たない)下層階級に対して一部のエリートが先導していく「啓蒙の構造」が内在していること、それが後期コールリッジの保守的・父権主義的な社会改革論にも結びついていくこと、を確認した。

研究期間全体を通じ、現代文学批評がロマン主義に見出していたプラグマティズム/リベラリズム的思考様式は、コールリッジにおいては科学のレベルでは社会における個の捉え方に対する方法論的問題意識において、政治的文脈では1790年代ラディカリズムへの内在的批判として、それぞれ現れており、古典的リベラリズムに見られたリベタリアンの側面よりもむしろ、自由それ自体の原理や条件、またコミュニティ形成の在り方を模索するコミュニタリアンの思考に導かれていったことがわかった。と同時に、19世紀英米でのコールリッジ受容に見られるように、科学的法則や形而上学的次元で彼の自由概念が極端な形で再解釈されることは、翻って彼自身のリベラリズムのうちにイデオロギー化されうる両義性や危険性も含まれていることが示された。

以上の研究成果については、大半は口頭発表や論文寄稿により公表済みであるが、については「コールリッジにおける宗教的情と

ゴドウィンの義務観念」という観点から論文を執筆中であり、9月以降の学会誌投稿を予定している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

(和文書評) 中村仁紀、『文学的自叙伝』(S. T. コウルリッジ著、東京コウルリッジ研究会訳、2013)、『図書新聞』3141号(2014年1月), p.4 [査読無]

(和文書評) 中村仁紀、『揺るぎなき信念 イギリスロマン主義論集』(新見肇子・鈴木雅之共編著、2012)、『英文学研究』(日本英文学会) 90号(2013)、pp.62-66 [査読有]

(英文書評) Nakamura, Yoshiki, *Early Romanticism and Religious Dissent* (Daniel E. White, 2006), 『人文研究』(大阪医科大学) 44号(2013)、pp.15-26 [査読無]

Nakamura, Yoshiki, “Defining Scrofula: Coleridge's ‘An Essay on Scrofula’ (1816) and the Medical Concept of ‘Constitution’ of the Early 19th Century”, 『人文研究』(大阪医科大学) 43号(2012)、pp.30-53 [査読無]

Nakamura, Yoshiki, “The Scope of Coleridge's Liberalism: In Light of American Transcendentalism”, *POETICA* (Yushodo) No.76 (2011), pp.65-78 [査読有]

[学会発表](計 2 件)

中村仁紀、「コウルリッジの“An Essay on Scrofula”と18-19世紀医学言説における『体質』(“constitution”)概念の変遷について」関西コウルリッジ研究会第157回例会、2013年4月27日、立命館大学

Nakamura, Yoshiki, “The Scope of Coleridge's Liberalism In Light of American Transcendentalism” Coleridge International Conference, 2011年7月18日、神戸コンベンションセンター

[図書](計 1 件)

中村仁紀、『『生命論』と一九世紀社会進化論 コウルリッジからスペンサーへ』英宝社、『阪大英文学叢書7 移動する英米文学』(石田久・服部典之編)、pp.37-51

6. 研究組織

(1)研究代表者

中村 仁紀 (NAKAMURA Yoshiki)

大阪医科大学・医学部・助教

研究者番号：30582564